

第16回上サロベツ自然再生協議会技術部会 議事概要

- ・日時：平成25年3月6日（木）13:00-16:30
- ・場所：豊富町民センター 大ホール
- ・出席者：27名（個人14名、団体・機関13名）
- ・傍聴者：12名

1. 開会

2. 座長及び座長代理の選出

○座長に井上京氏、座長代理に村元正己氏が選出された。

3. 座長挨拶：井上京氏

4. 報告

（1）緩衝帯実証試験について（北海道開発局稚内開発建設部）

○北海道開発局稚内開発建設部から報告（別添資料）

《質疑》

（構成員）実証試験地での緩衝帯の効果はよく解ったが、地区全体で緩衝帯による効果がどのように発揮されるのか。また、営農の面では農地の地下水位低下が望ましいと思うが、緩衝帯設置による農業への影響はどのようになっているのか。

（稚開建）緩衝帯は報告のとおり地区全体で10kmの施工を予定している。現在も順次整備を進めており、今回の実証試験地以外の場所でも観測を実施している。次年度からは、これらの整備済み箇所での状況についても報告したいと考えている。

また、緩衝帯を設置することにより、農地では湿原からの影響を受けなくなることから、暗渠排水による排水改良の効果として牧草の生育が良くなる、地耐力が増すなどのよい影響がこれまでの整備によって確認されている。

（座長）農業への影響については、直接事業に関わっているサロベツ農事連絡会議からその効果を伺いたい。

（構成員）当初、農地を25m幅で提供することに対しては、受益者に抵抗感があったものの、農業と湿原の共生を図ることの重要性については、今では受益者の間でも十分に浸透している。また事業による整備を進めることで、機能低下した農地が再生され牧草の収量が回復するという事実も実感として確認出来ている。

（構成員）農地の生産性が良くなるといった効果については、自然再生の効果とも併せて地域の発展のため積極的に発信していただきたい。

（2）沈砂池モニタリングについて（北海道開発局稚内開発建設部）

○北海道開発局稚内開発建設部から報告（別添資料）

《質疑》

（構成員）土砂の粒度データはあるか。下流に流出する浮遊土砂が気になるが捕捉率はどのくらいか。植物を植えると流速が落ちるうえ、植物自体が浮遊土砂を付着させるので活用すると良い。

（稚開建）今回の報告に含まれていないが、堆積土砂の粒度の計測はおこなっている。また、計

画では捕捉率は60%を目標としている。沈砂池にはヨシを植えているので、今後とも取り組むようにしたい。

(構成員) 浮流土砂の粒径などを確認した方が良い。また、この浮流土砂がペンケ沼やサロベツ川等の下流に影響を及ぼす可能性についても検討していただきたい。

(稚開建) ご意見については、今後、検討してみたい。

(構成員) 浮流土砂は感潮による塩分の影響で堆積する可能性がある。感潮の影響範囲を確認した方が良い。

(稚開建) 感潮の範囲まで把握はしていないが、可能な範囲で対応したい。

(構成員) 堆積土砂の出所は把握しているか。

(稚開建) 農地からの土砂流出は工事期間や牧草更新時期に発生するものと考えている。流域全体の発生要因までは把握していないが、今後、モニタリングを継続する中で、農地以外からの影響についても把握できるものと思う。

(3) サロベツ川放水路南側湿原周辺の乾燥化対策について(環境省北海道地方環境事務所)

○環境省北海道地方環境事務所から報告(別添資料)

(座長) 仮堰上げを行った水路3、4、5について、水路3は仮堰上げをする1年以上前からデータを取っているが、水路4、5は仮堰上げ直前からのデータしかないのか。

(環境省) 水路4、5に関しては仮堰上げの約2ヶ月前からのデータしかない。

(座長) 事前のデータが1~2年間程度あると比較がしやすくなる。今後何かやる場合は前もって1~2年間程度のデータを取るようお願いしたい。

(構成員) 本対策において想定される5年後の姿はどのようなものか。

(環境省) 目標はあくまでも背後にある高層湿原の維持と考えている。そのため、既に乾燥化した箇所の植生については、劇的な変化はないが、徐々に再生されていくものと思われる。

(構成員) 落合沼のように開水面を再生するのが目的であればそれでよいが、開水面は地下水に比べればはるかに早く水が動いてしまう。湿原全体の地下水を保全するのが目的であれば、溝という溝はなるべく埋め戻した方がよいのではないか。

(座長) 本対策に当たっては、放水路に向けて水が流出しているかどうかを詳細に調査し対策を講じる水路を選定したと記憶している。全てを埋め戻すことができれば理想的だが、埋め戻す泥炭には量に限りがあり、また現地まで運んでくると考えると、コストや効果などの按配で、影響の大きな水路を対象とすることはやむを得ないように思う。

(4) サロベツ原生花園跡地の植生回復試験について(環境省北海道地方環境事務所)

○環境省北海道地方環境事務所から報告(別添資料)

《質疑》

(構成員) B区画には外来種も増えているように見えるが、外来種を抑制するため水位を上げるということはできないか。

(環境省) 本試験の目標を背後の高層湿原の維持とすれば、ご指摘の方法も考えられると思う。各区域を今後どのように取り扱っていくかは、専門家の方々の意見を聞きながら進めていきたい。

(座長) 4区画を設定した考え方としては、掘り下げて相対水位を上げる、また、掘り下げた上で泥炭を埋め戻して植生回復を図る等、様々な手法を設定している。

過去に小規模で実施した試験でも水位を上げ開水面にした箇所は植生の回復が見られていない。私は、外来種は入ってきてはいるが、泥炭で埋め戻して遷移を進める方が回

- 復の近道なのではないかと考えている。環境省からは、開水面になっている箇所も今後埋め戻しを検討しているとの話があったが、皆さんからもご意見をいただけたらと思う。
- (構成員) 別の地域の話だが、開水面にしていた場所も2年くらいすると一気に植生が生えてきたことがあった。少しペースを落として開水面からやる方法もあると思う。
- (座長) 今であれば開発局の事業で発生した泥炭を入手しやすいということもある。環境省でもう少し調査し検討を進め、次回以降の技術部会で方針等を報告頂ければと思う。
- (構成員) 開水面に溜まった水はどこに流れているのか。栄養分を含んだ水が湿原に流入しササの繁茂を進めている可能性がある。
- (環境省) 溜まった水がどこに流れているかは把握していない。
- (座長) おそらく、溜まった水はほとんどが道路側溝を通じてサロベツ川に流入しているものと思われる。ただし、一部は地下水として周辺の湿原に流入している可能性もある。

(5) 泥炭採掘跡地の植生回復試験について (環境省北海道地方環境事務所)

○環境省北海道地方環境事務所から報告 (別添資料)

《質疑》

- (座長) 試験地は採掘してから何年目の場所か。裸地状態はどれくらい続いていたのか。
- (環境省) 1977年から約35年、裸地状態となっている。
- (構成員) 本報告における土壌水分調査の結果は、上手くいかなかった結果なのか。ネットがある方が表層の乾燥が進んでいるようにも見える。
- (環境省) そのような結果であると考え。しかし、体積含水率が75%とは下がりすぎと思われ、土壌水分計の設置の仕方が悪かった可能性もある。
- (構成員) 35年経過して全くの裸地状態となると、科学的に酸性が強い等の影響も考えられる。水分環境の科学的調査も必要ではないか。
- (環境省) ご意見を参考に、今後の検討課題としたい。
- (構成員) 採掘跡地に戻されたのは粉状のフミン質である。乾燥化しやすく水を吸収しにくい性質を見極めて対策をお願いしたい。
- (座長) 融雪後、植生調査が一番やりやすい時期に継続調査することが必要と思われる。
- (環境省) 環境省からその他事項について報告させていただきたい。次年度は平成14年度以来のレーザー計測(地形測量)業務を行う予定。解析が済んだら研究者の方にもデータを提供したいと考えている。また、近年サロベツ湿原でもエゾシカによる食害が懸念されている。予算は要望段階だが、湿原に影響を及ぼしているエゾシカに発信器を取り付け、行動生態を調査したいと考えている。

(6) ペンケ沼の現状調査について (北海道宗谷総合振興局)

○北海道宗谷総合振興局から報告 (別添資料)

《質疑》

- (構成員) 深淺測量の高さの管理はどのようにしているのか。
- (振興局) ペンケ沼近くにベンチマークを設けて測定している。
- (構成員) 富栄養化の進行具合に対する水質調査は実施しているか。
- (振興局) 調査していない。
- (構成員) ペンケ沼湖岸の植生状況について調査しているか。
- (振興局) 調査していない。
- (環境省) 環境省においても過去の湖岸の植生状況について調査していない。
- (構成員) 振興局は今回の調査結果をどのように判断しているのか。

- (振興局) 今回の調査結果を見る限りにおいては、過去に環境省が調査した調査結果と比較しても10年間で大きな変化は見られなかったため、現状が維持されていると判断している。
- (構成員) 下エベコロベツ川を昔のようにペンケ沼から離し、蛇行を復元するという選択肢も含めて、ペンケ沼の対策を検討する必要がある。
- (構成員) ペンケ沼は貴重な自然環境を残している。是非、皆さんで知恵を出し合ってペンケ沼の保全について検討していただきたい。
- (座長) ペンケ沼については、難しい問題でもあることから皆さんと一緒に議論していく事としたい。

(7) 稚咲内砂丘林自然再生事業平成24年度の実施状況について(林野庁北海道森林管理局)
○林野庁北海道森林管理局から報告(別添資料)

《質疑》

- (構成員) 昭和42年のサロベツ総合調査報告書の中に、稚咲内を境にして、北がモンゴリナラ、南がミズナラに分かれると記されている。今回このことに触れていないが。
- (林野庁) 今回は平成24年度事業の実施状況を報告させていただいた。参考意見として、今後調べてみたい。
- (構成員) 湖沼の開放水面面積の減少イコール水位低下といっても良いのか。実際に水位低下を示しているデータはあるのか。
また、飛砂によって湖沼が埋まっていることはないのか。湖沼の土壌を調査しているのか。
- (林野庁) 湖沼の形状等から全くイコールとは考えられないが、実施計画を策定するにあたり湖沼の開放水面面積を空中写真により判読し水位低下を表す指標としている。
なお、飛砂に関しては、今後調べてみたい。
- (構成員) 資料23頁の表4.3の電気伝導率は土壌の分析結果か。
- (林野庁) 本分析結果は、水質調査をしたものである。
- (座長) 数値的には問題ないようである(他の構成員から数値基準等の情報提供あり)。
- (構成員) 砂丘林の湖沼は平成7年頃から急に水位が低下したように思われる。また、全体的に急に蚊が多く出るようになった。沼に魚がいなくなったからと思うが。
また、湖沼の数は、1947年に241あったものが、2005年には177個に減少したとの報告を聞いている。
- (林野庁) 24年度から事業が始まったところであり、水位等は今後も継続的に現状の把握を行うこととしている。
- (座長) 立枯れ箇所への植栽、堆雪柵の設置は予定どおり実施するのか。
- (林野庁) 実施計画のとおり実施区域に変更はなく、植栽、堆雪柵により自然再生の目標を達成していく考えである。
なお、24年度の詳細調査で、立枯れ箇所には亜高木層や稚樹も分布していることが分かったことから、当面推移を見守りたい。
また、25年度には堆雪柵を設置したいと考えている。

以上